

## 医療崩壊 医師会のやる気

吉村レディースクリニック 吉村 猛

WHOが医療の光と影を総合的に評価して、日本の医療を賞賛している間にも、日本国内では、世界の医療の光の部分のみを取り上げたマスコミの机上の空論による医療バッシングの嵐、救急医療をサービスと勘違いしたコンビニ受診の問題、物言わぬ大多数の患者を徐々に蝕むトンデモ医療判決、ハムラビ法典に回帰したかのような医療事故への検察介入、公家集団のごとき医師会体質など複合的な要因が複雑に関与し、日本の医療体制は崩壊に向けて、まさに国民全員がアクセルを踏み続けている。

本来、正しい方向に舵を取らねばならない運転手であるべき医師会も、乗客から言われるままにブレーキを踏むことなくただ黙って運転をしてきたのではないか。医療崩壊の原因がこの特集で様々な面から語られるだろう。その原因の一端として、私は、医療崩壊に向かってアクセルを踏み続けた運転手の責任を追及したい。

本来、医師の職能集団である医師会が守るべきは、患者を救いたいというモチベーションを持った医師である。そのようなモチベーションを持った医師を増やすことこそが、医療を受けなければならない患者を救うことになる。この原理原則がわかっていないためか、理解不足、勉強不足のマスコミの意見をご高説ごもっともとばかりに無見識に医師会雑誌に載せ、マスコミに擦り寄る姿は、はっきり言って情けない。

私が医師になった頃、すでに民事の医療判決において、当時の医療水準から考えても不当な判決は多々あったが、「これは厳しすぎるな」などの愚痴が医師同士の話で出ても、医師会が、組織として世間にそのような判決に対してアクションをとった

記憶は寡聞にして存じあげない。

現場の医師たちの不満や愚痴のガス抜きができないまま20年以上が経ち、最近では、術中死で医師が逮捕されたり、ある職能団体に関係の深い一医務課長の一片の通達により日常の観察業務が法律違反とされ現場が大混乱したり、瑕疵のない問題を取り上げ大々的にマスコミが医療バッシングした後、その記事をうしろだてに患者家族が刑事告発や民事訴訟を起こしたりと、大声で怒鳴り散らす一部の人たちが医療崩壊にターボをかけている。

しかし、このような現状になっても大多数の医師が、他人事として受け止め、医師会が大々的に公式見解を發表することはない。大声で怒鳴り散らす人々を相手にしている現場では、自らに降り注ぐかもしれない火の粉を自分自身が払わなくてはならないため、当然、医療的モチベーションは低下する。もちろん、医療訴訟にたいして医師会にも委員会があり、熱心に頑張っておられる先生方もいらっしゃるが、それを医師会が真剣に受け止め、大きな運動とすることはない。さらに、マスコミのただ売れば良いためだけの粗悪な記事や文言にも間髪いれず訂正を要求するような機動性も持ちあわせていない。

歴史を振り返ると、自らの権利は自らが守り通さなければ、実態のない権威のみに頼っていた公家が莊園支配から駆逐されたように力のあるものに収奪されるのみである。

志を持った未来の医師のために医師会が医師というプロの職能団体として自らの権利を守る戦いを起こさなければ医療崩壊は今後も進行するであろう。